

# 一九 畑 歡三



『中学部アルバム  
一八九三年〜一九四七年』より

「何の為に世の中に生まれ出たのか」をよく考えさせた関西学院の校風に魅力を感じ入学した。当時の学生がそうであったように、学修だけでなく、その初期にあつて関西学院の名を世に知らしめたグリーククラブや野球部といった課外活動で活躍することで、自らの人生の方向を定めた。卒業後、自ら定めた道を確実に歩むために、同志社で学び、東京へ転じて後、中等教員英語科試験に合格する一方、さらなる学びのために早稲田大学文学専門部に入学、その卒

今では関西学院大体会

育会のモットー 'Noble Subbomness' の想起者として、その名が記憶される畑歡三は、初期の関西学院で培われていた「自ら修め、自ら治め」「立身出世とか、成功とか」は教えず、

業生となった。卒業後、当時キリスト教主義学校であった麻布中学校で教師の道を歩み始めた。彼の学びは、国内に留まることなく、当時の関西学院の卒業生がそうであったように留学への道を選び、自ら 'Subbomness' を実践した。まさにそれは、'Mastery' の実践であった。

その 'Mastery' の成果を「立身出世」や「成功」でなく、母校の教員となることで教育の場に生かそうとした。しかし、その教育の真の目的を彼に自覚させたのが、万国教育会議への出席であった。それは第一次世界大戦後、世界が平和を希求し、国際連盟成立を軸に平和を実現しようとしていた時期に開催された国際会議であった。この平和運動には、すでに関西学院の同窓生であり畑の留学を支えていた乾精末が十年來アメリカの地で取り組んでいたものであった。畑が教育の目的を平和運動と明確に結びつけることができたのが、この会議への出席であった。

肌の色の違いや言葉の違いを乗り越えて「皆互いに兄弟である」と云う考と感情を養っておかなければ「平和は実現しない」と。その平和を実現するのがまさに教育だと。この畑の想いに比べて、今の私たちは教育の目的を矮小化していないであろうか。

## I はじめに

畑歎三は、丸亀市で父平学、母もとの次男に生まれた。<sup>(1)</sup>郡長選出の祝宴での狼藉が一因となり平学は亡くなった。<sup>(2)</sup>その死に際して陽明学の素養のあつた平学は「天これを知る」と語つたが、丸亀藩の武士の娘であつたもとは「敵討ち」を願つていた。しかし、キリスト教徒であつた知人が奨めた聖書を読むうちマタイ伝の「仇を報ゆるは我にあり」<sup>(3)</sup>が「天これを知る」という章句に符合することを知り、キリスト教徒となつた。伝道師となることを願ひ神戸女子伝道学校に入学したため、六名の兄弟姉妹はバラバラとなり、生活の場も丸亀から高松に移つた。もとは松山教会の伝道師となつていた。<sup>(4)</sup>畑歎三は、松山中学校に入学した。同じ年に『坊ちゃん』の夏目漱石もまた松山中学校に赴任してきた。帰省中の関西学院学生織田長光の勧めと「自助会」の存在に魅力を感じ、関西学院普通科へ転入学した。「県立学校とは異なつて自由で」「試験の時に監督者もない」ほど「自ら修め、自ら治め」「立身出世とか、成功とか錦を故郷に飾る」とは教えず、「何の為に世の中に生まれ出たのか」をよく考えさせてくれたという。<sup>(6)</sup>在学中は、自助会へ入会し、後の院長神崎驥一や画家となつた定方末

七郎、吉沢芝四郎らと活動する一方、グリーククラブや乾精末らとともに野球部で活躍した。<sup>(7)</sup>卒業（一八九九年）した同窓生は畑に加えて、内村順也（内村鑑三の弟）、柴田勝衛である。<sup>(8)</sup>

卒業後一旦松山に帰郷し、当時松山で伝道活動し、一九〇六年同志社に転じたS・L・ギューリックが執筆中の *Evolution of the Japanese: Social and Psychic*（一九〇三）の手伝いや子ども家庭教師で進学の資金を貯め、同志社に進学したものの、その教育に絶望し、退学した。東京へ出て中等教員英語科試験に合格したものの、教員にはならず早稲田大学文学専門部に入学、その第一回卒業生となつた。その後江原素六によつて創立された麻布中学校に勤めた。

第八高等学校や母校関西学院への就職の誘いを断り、麻布中学校を辞任し、当時サンフランシスコ近辺に住んでいた神崎や乾を頼り渡米、日本人小学校の教員をして後、カルフォルニア大学大学院で美学とギリシャ哲学を専攻した。入学に際して当初学部入学を勧めた学校も、出身校が関西学院であることが分かると、大学院への進学を認めたほど、関西学院の英語教育は進んでいたという。<sup>(9)</sup>M・A・を取  
得し、帰国した。

帰国後、関西学院高等学部教授に就任し、同時に庭球部部長、グリーククラブ初代顧問となった。部長時代に今では関西学院大学体育会のモットーとなっている「Noble Stubbornness」を庭球部に与えた。さらに関西学院を休職し渡米した。滞米中、関西学院から委任状を受け、萬国教育会議に出席し、教育への信念を手にした。帰国後、関西学院高等商業学部教授に就任し、一九二八年九月までその職にあった。その後、日本の実業家から、アメリカのチェーリストア研究を依頼され三度目の渡米をはたし、その後ヨーロッパへ渡り、帰国後、高等商業学部、専門部文学部、商経学部の講師を勤め、戦中・戦後の旧制中学部長を勤めた。その後も関西学院大学の講師等を勤めて後、退職。さらに、神戸の海外書籍貿易会社に顧問として入社し、一九五七年一月三二日に逝去した。

II 略歴・業績一欄<sup>(10)</sup>

- 一八八〇年 八月一六日 丸亀に生まれる。
- 一八九五年 松山中学校に入学
- 一八九七年 九月 関西学院普通学部普通科第三年級に転入学。自助会に属し、グリーククラブ、野球部に参加<sup>(11)</sup>
- 一八九八年 六月一六日 関西学院青年会演説会で演説（演題「文学ト宗教ヲ論ジテ現日本文学ニ及ブ」<sup>(12)</sup>）
- 九月 関西学院野球部の乾行義塾戦で投手曲球（カーブ）を投げて大勝<sup>(13)</sup>
- 一八九九年 三月 四日 関西学院青年会例会で演説（演題「奮起セヨ青年」<sup>(14)</sup>）
- 三月 二七日 関西学院普通科卒業<sup>(15)</sup>
- 一九〇〇年 此の頃「伊予国松山市北京町」に在住<sup>(16)</sup>
- 九月 同志社に入学<sup>(17)</sup>
- 一九〇二年 二月 三日 文部省中等学校教員英語科試験合格により英語科中等教員免許状を受け

秋

早稲田大学に入学<sup>(18)</sup>

一九二二年 七月二〇日

私立麻布中学校辞職<sup>(24)</sup>

一九〇三年 一月

東京市国民英学会講師（一九〇五年  
一二月まで）

一九二二年 二月

渡米

東京基督教青年会英語学校講師（一  
九〇八年三月まで）

一九二三年 一月

カリフォルニア州アラメダ市日本人  
小学校長（六月まで）<sup>(25)</sup>

早稲田大学文学専門部（第一回生）  
卒業<sup>(19)</sup>

八月二六日

カリフォルニア大学大学院入学、美  
学、ギリシャ哲学を専攻<sup>(26)</sup>

一九〇五年 七月一五日

私立麻布中学校英語教員 就任

八月

カリフォルニア州オークランド市日  
本人小学校長（一九一五年一二月ま  
で）<sup>(27)</sup>

一九〇六年 一月一〇日

同校英語科主任となる。

一九二五年 五月二〇日

カリフォルニア大学大学院修了、M・  
A・の学位を取得<sup>(28)</sup>

一九〇八年 四月二日

自宅（東京市麻布竹谷町二番地）に  
て関西学院同窓会東京支部会春季例  
会を開催。この頃、関西学院同窓会  
東京支部役員<sup>(20)</sup>

五月三日

関西学院在米同窓会野球大会（於  
オークランド市リンコン公園野球  
場）に参加<sup>(29)</sup>

一九〇九年 四月一七日

第二回関西学院同窓会総会（於 関  
西学院自修寮）の役員改選で、東京  
支部評議員<sup>(21)</sup>

一九二七年 四月

関西学院高等学部教授に就任。主と  
して英文文を担当（当初は美学も講  
じた）<sup>(31)</sup>

一九二二年 三月三日

第四回関西学院同窓会総会（於  
関西学院食堂）の役員改選で、評  
議員<sup>(22)</sup>

四月

関西学院庭球部々長となる。<sup>(32)</sup>

四月 三日

井手とみゑ子と結婚（於 東京麻布  
メソヂスト教会）<sup>(23)</sup>

週に一度研究室に通う（二日程）<sup>(33)</sup>

京都帝国大学で東洋美術を研究、一  
週に一度研究室に通う（二日程）<sup>(33)</sup>



一九二〇年 六月二十五日  
〜七月二〇日  
一〇月  
秋  
一九二二年 四月  
五月二四日

関西学院グリークラブ初代顧問に就任（高等学部学生会社交部顧問）  
大阪郡部出水被害に関西学院各部の基督教青年会慰問団を組織し慰問  
関西学院同窓会幹事<sup>(36)</sup>

関西学院グリークラブ最初の演奏旅行（北陸・信州・東海方面）引率<sup>(37)</sup>

関西学院野球部第一回早稲田大学定期戦の幹旋<sup>(38)</sup>

関西学院庭球部顧問として「NOBLE STUBBORNNESS」（高貴な粘り）のモットーを部員に与える。<sup>(39)</sup>

関西学院文学部教授<sup>(40)</sup>

明石組合教会日曜学校主催の関西学院グリークラブ演奏会開会に当たつての講演「宗教々と音楽」<sup>(41)</sup>

関西学院を休んで二回目の渡米  
関西学院を休んで二回目の渡米  
萬国教育会議（サンフランシスコ）に参加<sup>(43)</sup>

一九二三年 六月  
秋  
一九三〇年 九月

帰国。関西学院高等商業学部教授に転じる。<sup>(44)</sup>

一九二五年 夏  
この頃、関西学院陸上競技部々長となつてゐる。<sup>(45)</sup>

関西学院学生会・商学会・文学会主催の「文化大講演」で講演（演題「人生価値とは何ぞ」）「プレトニズムを論ず」<sup>(46)</sup>

関西学院グリークラブ（音楽社交部）顧問を辞任<sup>(47)</sup>

「ユニットシステムの理論と実際」署名記事（『関西学院時報』第一八号）<sup>(48)</sup>

英語講演旅行（東都遠征）<sup>(49)</sup>

「学院の創立のことも」署名記事  
「関西学院新聞」第二三三三号  
「庭球部今昔ものがたり」署名記事

一九二七年一月二日  
「関西学院新聞」第三〇号  
司法省嘱託少年保護司となる。

一九二八年 五月  
九月  
関西学院を退職、三度目のアメリカ渡航（南米とヨーロッパをまわる）<sup>(50)</sup>

一九三〇年 四月  
帰国<sup>(51)</sup>

関西学院高等商業学部、専門部教員

- 一九三三年二月二〇日 「ブラジルから帰って」（署名記事）  
 となる。<sup>(52)</sup>
- 一九三三年二月二〇日 『関西学院新聞』第七一号  
 『回顧』（署名記事）『関西学院新聞』  
 第二五九二号（大学昇格特別号）  
 「吾等の大臣永井拓相を語る」（随筆）
- 一九三三年七月 『公報』第一四号（関西学院高等商業学部同窓会）
- 二月 「母校の安息日」『公報』第一五号（関西学院高等商業学部同窓会）
- 一九三四年二月二日 関西学院商経学部設立準備教授会の懇親会（於〈大阪〉ガスビル）に出席<sup>(53)</sup>
- 三月 関西学院大学教員として文部大臣の認可を受ける。<sup>(54)</sup>
- 四月 関西学院商経学部講師となる。<sup>(55)</sup>  
 関西学院自助会再興の後援会結成の発起人のひとりとなる。<sup>(56)</sup>
- 一九三八年四月三日 関西学院グリークラブ第四代顧問就任の歓迎会（於 神戸大丸食堂）<sup>(57)</sup>
- 五月三日 関西学院英文学鑑賞研究会第一回鑑賞会開催<sup>(58)</sup>
- 八月 河本くに江と結婚
- 一九三九年七月二日 長男道也誕生<sup>(59)</sup>
- 七月六日 くに江夫人死去<sup>(60)</sup>
- 一九四〇年六月 『関西学院五十年史』刊行（編纂委員）<sup>(61)</sup>
- 一月 『Short Story Mania』を発表（『饗宴』第二号）<sup>(62)</sup>
- 一九四四年四月 関西学院法文学部講師<sup>(63)</sup>  
 田中喜美代と結婚<sup>(64)</sup>
- 一九四五年三月七日 （旧制）関西学院中学校長就任<sup>(65)</sup>  
 兵庫県教職員適格審査委員会より適格判定を受ける。<sup>(66)</sup>
- 一九四六年一〇月三日 応援歌「大空に高く」を作曲<sup>(67)</sup>
- 一九四六年頃 関西学院中学校部長辞任、退職<sup>(68)</sup>
- 一九四七年六月三日 松山語学専門学校に赴任。同中学校を十ヶ月でやめる。<sup>(69)</sup>
- 一九四八年四月 関西学院大学講師となる。<sup>(70)</sup>
- 六月 「憶い出断」『母校通信』第一号
- 一九四九年五月二五日 グリークラブ五〇周年記念合唱音楽会（於 大阪・北野劇場）に参加<sup>(71)</sup>

一九五〇年 四月 一日

関西学院大学経済学部嘱託講師となる。<sup>(72)</sup>

五月

関西学院長今田恵宛に、学院運営に  
関する書簡（意見書）を提出<sup>(73)</sup>

一九五二年 三月 二六日

関西学院グリーククラブ第六代顧問に  
就任<sup>(74)</sup>

一九五三年 三月 二三日

関西学院を退職<sup>(75)</sup>

六月 四日

関西学院グリーククラブ顧問交代式  
（顧問を辞任）<sup>(76)</sup>

海外書籍貿易会社（神戸市内）に入  
社（顧問）<sup>(77)</sup>

一九五七年 一月 二三日

逝去

二月 二七日

追悼式<sup>(78)</sup>

### III おわりに

一九二三年六月、サンフランシスコで開催された万国教育会議に参加した際、畑は改めて教育の重要さを気づいた。

「平和を確立しようとしたものに政治家があり、宗教家があるが一つも成功しない。それは何故かと云うと、心の中から平和が培われて居ない。お互いの理解が出来ていな

い。それだから政治力や宗教団体の力をもってやっても徹底しない。子供の知己から顔色が違つていようが、言葉が違つていようが皆互いに兄弟であると云う考と感情を養つておかなければいけない。そしてこれは教育家の仕事である<sup>(79)</sup>。畑は、ここに「愛の精神」を看取るのである。この教育への情熱が「学生への熱愛―稀に見る青年教育者」を支え、畑を「審美感の強い」「心身とも清潔で且つ理想主義者<sup>(80)</sup>」へと育てたのである。

その畑は、自助会を「理想的な小社会」と捉え、その復活を願い、最晩年ですら「Mastery for Service」の精神を維持して少しでも三日月の光を輝かす為に Noble Stubbornness の意気で働きたいと希つています<sup>(81)</sup>。そこに、関西学院の信条であった「個性の尊厳、個性の完成」の場を見た<sup>(82)</sup>。その実現のために、畑は晩年まで「関西学院へ帰つて大いに働こう<sup>(83)</sup>」としたのである。まさにこの意志こそ、若き畑と神崎がアメリカの宿舎で固めたものであった。

### 【注】

(一) 畑歎三『阿ゆみ』（平賀耕吉編「三日月の影」分冊第一輯、一九五一）。このガリ版刷りの小冊子は、畑歎三の口述自伝の記録である（「序」）。以下の、記述はこの『阿ゆみ』

によることが多い。なお、母「もと」は「モト」〔「戸籍抄本」関西学院学院史編纂室蔵〕とも、「基」〔「松山教会百年史稿」一九八六〕と書かれることがあるが、本稿では「阿ゆみ」に従って「もと」と書く。

(2) 畑平学については、『香川県史』通史編第四卷（一九八九年、六二二頁）、第五卷（一九八七年、八一・四八九頁）に名がでてくる。

(3) この聖聖の出典は、「マタイ伝」ではなく、おそらく「ローマ書簡」一二章一九節もしくは「ヘブライ書簡」の一〇章三〇節だと思われる。前者の新旧共同訳では「愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。」「復讐はわたしのすること、わたしが報復する」と主は言われる」と書いてあります。」であり、後者の共同訳では「復讐はわたしのすること、わたしが報復する」と言い、「復讐はわたしのすること、わたしが報復する」とあり、いずれも旧約聖書「申命記」三三章三五節である。「わたしが報復し、報いをする。彼らの足がよろめく時まで」を引用したものである。

畑歎三が慣れ親しんだと思われる明治訳によれば、前者は「仇を復すは我に在」であり、後者は、「仇を報るはわれにあり」となっていることから考えると、字句の点から判断すると、畑が引用した聖句は「ヘブライ書簡」に近い。他方、内容および「マタイ（馬太）」と「ローマ（羅馬）」との名称の類似性から推定すると、「復讐の

禁止」を説くことで有名なのは「ローマ書簡」であることから、畑の念頭にあったのは「ローマ書簡」の言葉だった可能性が高い。なお、この出典とその理解についてご教授いただいた辻学広島大学総合科学研究科教授に深く御礼申し上げます。

(4) 神戸女子伝道学校はのちに合併することで、聖和女子学院、聖和女子短期大学、聖和大学となり、二〇〇九年四月関西学院と合併した（原真和「関西学院にとつての聖和史①」『学院史編纂室便り』No.32、二〇一〇年一月）。前掲書『松山教会百年史稿』の一八九一（明治二四）年欄に、畑基伝道師の名がある。

(5) 織田長光については、「関西学院青年会記録」（「関西学院キリスト教育資料Ⅰ」一九七六）の「明治廿六年九月改正名簿」欄（三〇頁）に、名前があるが、所属は未確認であり、関西学院の卒業は確認できていない。

(6) 畑歎三「回顧」（「関西学院新聞」第二五九二号、大学昇格祝賀号、一九三二年二月二〇日）

(7) 畑のグリーククラブや野球部の活躍については、『関西学院グリーククラブ八十年史』（一九八二）、『関西学院野球部百年史』（一九九九）および米田満「関西学院スポーツ史話」神戸原田の森篇」（二〇〇三）を参照のこと。定方末七郎については、伊藤笹子・井上琢智「定方末七郎」『シリーズ 関西学院の人びと 一七』（「関西学院史紀

要』第十六号、二〇一〇)を参照のこと。吉沢芝四郎は、学院史編纂室蔵「千八百九十三年 学籍簿」「明治三〇年度普通学部一年級」欄に、また、前掲書「関西学院青年会記録」の「明治二八年十月十四日以降会員名簿」欄(四三頁)その他(四四・四七・五三・五四・五七・五八頁)に、名がある。そして、乾精末については、井上琢智・高橋正・比留井弘司「乾精末」シリーズ関西学院の人びと一〇〕(『関西学院史紀要』第十一号、二〇〇五)を参照のこと。

(8) 内村順也については、井上琢智「内村順也」「シリーズ 関西学院の人びと 二二」(『関西学院史紀要』第七号、二〇〇一年)を参照のこと。

前掲資料『阿ゆみ』には、上田八重丸の名があげられているが、『開校四十年記念 関西学院史』(一九二九)附録「普通学部卒業生名簿」欄(明治三二年)には、その名が無く、前年度卒業生には塚本八重丸がある。関西学院同窓会編『会員名簿』(一九九八年)では、「明治三二年 上田八重次郎」「明治三二年 塚本八重丸」とある。なお、前掲「千八百九十三年 学籍簿」(「明治三二年三月 四年級」欄)には、烟、内村順也、柴田勝衛の他に上田八重次郎の名前が見える。

(9) 前掲資料『阿ゆみ』一五頁。

(10) 以下の「略歴・業績一覧」は、学院史編纂室蔵「烟歡

三履歴書」(一九一七年附、一九五〇年九月二〇日附)、一九三七年学歴調査綴「履歴」、前掲資料『阿ゆみ』および『関西学院事典』(二〇〇一)を主たる典拠にして作成。なお、歓三の表記については、出生届では観三と誤記され、以降、観・観・歓・歓の字を随時使用(『関西学院事典』)されているが、本稿においては「歓三」と記述する。また、『阿ゆみ』では三男と書かれている。さらに、出生地については「履歴書」原籍欄では東京府(本籍欄東京都)とあり、おそらく、それに基づき、例えば「日本キリスト教歴史大事典」(教文館、一九八八)では「東京生まれ」とある。ただ、履歴書類では出生地の丸亀の詳細な住所については確認できていない。

(11) 関西学院入学の理由について、自助会があること、キリスト教精神のもとに勉強していること等を烟は述べている(前掲資料『阿ゆみ』六頁)。また、入学時の模様について、原清「忘れ得ぬ恩師(三三)」(『母校通信』第一二号、一九五四)の記事がある。学院史編纂室蔵「入舎履歴」に、一八九七年九月一日附の烟の入舎証があり、入学後ただちに自助会に属した烟は、「忘れられないのは自助会である。今考えて見てもあれは理想的な小社会であった」と記している(前掲資料「回顧」)。烟は、グリーククラブ草創の頃の最も古い部員で、グリーククラブ創立直前、仲間とともに賛美歌などをうたい「一頭地を

抜いた音楽通」であった、とある（前掲書『関西学院グリークラブ八十年史』（四一・三五四頁）。畑の在学時（第三年級第二学期～第四年級第三学期）の成績は、前掲「千八百九十三年 学籍簿」に記載されている。

(12) 前掲書「関西学院青年会記録」七五頁

(13) 『関西学院百年史 通史編Ⅰ』一九九七、一八二頁。乾行義塾は神戸市内の鯉川筋にあったミッション・スクール。乾行義塾との試合については、前掲書『関西学院スポーツ史話（神戸・原田の森篇）』（二七～二八頁）に詳しく記載されている。この点については、以下の資料も参照のこと。乾精末「亡き畑学兄」（『母校通信』第一八号、一九五七、五三頁）では、乾行義塾戦でバッテリーとなったこと、前掲書『関西学院野球部百年史』の乾行義塾戦の記事に、「松山時代にアメリカ人教師からカーブの投げ方を教わった畑が投手」（一九頁）とある。また前掲資料「忘れ得ぬ恩師（三）」に、カーブの研究・練習についての記事（一七頁）があり、柳田真輔「神戸の野球史」（六甲出版、一九八〇）には、乾精末の文の紹介がある（六一～六二頁）。

(14) 前掲書「関西学院青年会記録」八五頁

(15) 卒業式の卒業演説で、畑は、「味噌汁の香」の題で自助会の苦学生として今後の卒業をかちえた喜びを述べた（中村賢二郎「逝きし原田の森の友を偲ぶ」（『関西学院

七十年史』一九五九、四四五～四六頁）。

(16) 『関西学院同窓会報』第三号（一九〇〇）「個人欄」に、「畑歎三君 故山に在りて同地の英語会の為青年会の一方ならぬ尽力をなされつゝあり」（一八頁）とあり、同誌「同窓姓名録（明治三三年七月調）」欄に、「伊予国松山市 北京町」（二四頁）とある。

(17) 畑は、一九〇〇（明治三三）年九月二三日に同志社普通学校の第四学年（第一期九月上旬～二月下旬）に入学し、第二期（一月上旬～三月下旬）まで在籍したものの、第三期（四月上旬～七月下旬）に休学し、一九〇三（明治三六）年四月に除名となっている（『明治三三年四月起 同志社普通学校学籍簿』）。なお、この調査については、同志社社史資料センター事務長の落合万里子氏のお世話になりました。記してお礼申し上げます。同志社への入学について、「一年間働いて貯金ができたものだから、新島先生の伝記を読んで感激した同志社へ行った。ところが当時同志社は衰微のどん底にあり、何等の感激もなく私は一年の後に止めてしまいました」と畑は述べている（前掲資料「阿ゆみ」一一頁）。また、「卒業後もこゝ、（関西学院）に長くいたいと思いましたが其頃は上級部がありませんでしたので一年程同志社に行き」とも記している（畑歎三「三日の光」『母校通信』第一一号、一九五三、二七頁）。

- (18) 早稲田大学入学年度については、前掲「履歴書」類に記載はないが、文部省中等学校教員英語科検定試験合格後に東京基督教青年会英語学校などで夜に教えながら通学した（前掲資料『阿ゆみ』）とある。また、「明治三五年の秋」東京に上つて早稲田大学に入る。借りた牛込塾の隣室に永井柳太郎が居て旧交を温めることが出来、二人は関西学院の同窓会を開いたりした（烟歛三「吾等の大臣永井拓相を語る」『会報』第一四号、関西学院高等商業学部同窓会、一九三三）とある。
- (19) 早稲田大学の卒業については、前掲「履歴書」類に「七月十五日 大学部文学科卒業」、「七月 文学部哲学科卒業」、「六月 文学部卒業」とある。
- (20) 『関西文壇』第五号（一九〇八年九月）「同窓欄」六二・七八頁
- (21) 『関西文壇』第七号（一九〇九年七月）「同窓欄」五一～五二頁
- (22) 『関西学報』第一二二号（一九一一年六月）「同窓欄」一〇一～一二頁
- (23) 前掲書『関西学報』第一二二号「同窓欄 個人消息」一九九頁、『護教』第一〇三〇号（一九一一年四月二二日）「個人」欄、一四頁
- (24) 麻布中学校を退職、渡米の経緯について、吉岡美国関西学院院长から関西学院に帰らないかという手紙があり、
- 「関西学院へは今の儘では帰れません。米国へ渡つて勉強し、関西学院に恥しからぬ者になつてから先生の御膝下に帰ります」と返事。また、神崎驥一・乾精末がサンフランシスコ付近にいたので、二人と打ち合わせて渡米、と烟は述べている（前掲資料『阿ゆみ』一二～一三頁）。
- (25) アラメダ市日本人小学校・オークランド市日本人小学校の模様については、前掲資料『阿ゆみ』（一四頁）を参照。『関西学報』第二六号（一九一三年七月）「同窓欄」（九八頁）に、烟の住所は「2311 Buena Vista Ave. Alameda, Cal.」とある。
- (26) カリフォルニア大学で A・U・ポープ (Pope) 教授の指導のもとに美学専攻（前掲「履歴書」）。同教授について、前掲資料「忘れ得ぬ恩師（三）」（一八頁）に記述がある。
- (27) 前掲「履歴書」。なお、前掲書『日本キリスト教歴史大事典』には、「在米中（一九一四年九月―一七年三月）オークランドで日本人小学校長」とある。この頃パークレー市山手のスプリース街に神崎驥一と一緒に住んでいた（前掲資料『阿ゆみ』一七頁）。
- (28) 『関西学院六十年史』（一九四九）附録「関西学院現任教職員一覧」の烟の欄に、マスター・オブ・アーツとある（三〇七頁）。
- (29) 対戦相手の桜倶楽部は当地の高等学校に通う日本人を主として組織した野球団で、烟はパークレー市より神崎

驥一と参加、守備はセンターであった(『関西学報』第二〇号、一九一五年七月、七八〜八〇頁)。

(30) 平賀耕吉「畑歛三先生を悼む」(『母校通信』第一八号、一九五七)に、「大正五年大学院を終え、M・A・学位を得て、六年帰国」とある。

(31) 前掲「履歴書」類に、「関西学院英語教員として文部大臣の認可を受く」、「四月 関西学院高等学部教授」とある。前掲書「開校四十年記念 関西学院史」に、「大正六年四月高等学部教授となり、英語及び美学を講ず」(二七四頁)とあり、『私立関西学院高等学部文科商科要覧(大正六年度)』に英語担当「同『要覧』の大正七・八・九年度に英語、美学担当とある。また、学院史編纂室蔵「大正八年度受持学科目配当表(高等学部)」に、「商一 英作 和英、文一 和英、文三 英和 和英、文四 英和 英作 美学」とある。関西学院就任当時について、畑歛三「就任当時の思出」(『関西学院高等商業学部四十年史と思い出の記』(一九四九)二九頁)の記事がある。

(32) 『関西学院庭球部七十年史』(一九八四)に、一九一五年度から一九二二年度まで部長とある。

(33) 前掲資料『阿ゆみ』。なお、『会誌』第一号(関西学院中学部、一九一七年一月)同窓欄に、畑の住所(京都市寺町通荒神口上ル東へ入)が掲載されている。

(34) 前掲書『関西学院グリーククラブ八十年史』四一・三五四

頁。一九一七年度の高等学部学生会の組織は外交部にグリーククラブ、ストリングバンド、弦月絵会があった(『関西学院学生会抄史』学生会組織年表、一九三七)。なお、この年の九月にチエコ兵楽隊を招待した演奏会の開催に、畑はグリーククラブ顧問として尽力したであろうと思われる。

(35) 前掲書「開校四十年記念 関西学院史」一三四頁

(36) 『関西学院同窓会報』第二号、一九一九、九頁

(37) 前掲書『関西学院グリーククラブ八十年史』五六〜五九頁。

また、前掲書「開校四十年記念 関西学院史」に、夏、畑教授引率の下に北陸、中仙道を経て東京に至る大演奏旅行とある(一八一頁)

(38) 前掲書『関西学院スポーツ史話』神戸原田の森篇』二〇八頁

(39) NOBLE STUBBORNNESS は、もともと一九二〇年に生まれた硬式庭球部のモットーで、「高貴な粘り」「品位ある不屈の精神」「高尚なるねばり強さ」「気品の高い根性」などと訳されながら関西学院大学体育会全体のモットーとなっていた。庭球部主将(朝長正男)が畑庭球部長に依頼して、当時の庭球部に最も必要と思われるモットーを与えてもらった(前掲書『関西学院事典』二五二頁)。同標語については、米田満「庭球部」はじめ物語」と Noble Stubbornness の標語、朝長正男「庭



球部の生い立ちとノーブル・スタボネスの由来」(前掲書『関西学院庭球部七十年史』、前掲書『関西学院スポーツ史話』神戸原田の森篇) (一九五〇九六頁)を参照のこと。なお、Tobie Stubbornessの典故については、新井節男「ノーブルスタボネス その意味するもの」(『関学ジャーナル』第五七号、一九八四年四月)も参照のこと。なお、このモットーが与えられた時期については、「庭球部」はじめ物語』とNoble Stubborness』では、「大正七年畑部長は部員に」とあるが、『関西学院庭球部七十年史』(年譜)では、大正九年とあり、「庭球部の生い立ちとノーブル・スタボネスの由来」の記事も大正九年秋とされている。このモットーについては、他に以下の資料がある。米田満「関西学院体育スポーツ抄史」原田の森時代の先人に聞く」(『関西学院史紀要』第二号、一九九二)、畑道也「父、そして友」(『関西学院体育会OB倶楽部会報』第二六号、一九八六)、加えて、一九七七年三月の同モットーの記念碑除幕式の碑文でも、「大正九年秋 畑歛三部長は部員の精神的な拠り所として NOBLE STUBBORNNESS (気品の高い根性) という標語を与えた」とある。

(40) 文学部成立とともに文学部教授となり、高等商業学部の授業をも助ける(前掲書『開校四十年記念 関西学院史』一七四頁)。この点について、畑の採用申請書

(一九二〇年七月一日附、文部大臣宛)、採用認可書(同年七月一六日附)(学院史編纂室蔵「高等学部教員開申書綴」)の資料がある。加えて、『文学部創立回顧』(関西学院文学部文学会、一九三四、三一頁)では、「畑教授も一九二〇年四月に文科教授となり一九二二年九月には早や出られたが爾来講師として英作文をやつてをられる」とあり、『私立関西学院文学部要覽』(一九二二年一月)には、「教授 英語、美学」(四頁)とある。

(41) 『関西学院グリー・クラブ史』一九四〇、発行者畑歛三、八二頁

(42) ポープ教授よりの勧誘状があつて渡米した経緯は、前掲資料「忘れ得ぬ恩師」(三) (一八頁)を参照。

(43) 前掲書『開校四十年記念 関西学院史』一五三頁。前掲資料「阿ゆみ」には、「関西学院理事会委任状を携えて、世界教育会議に出席」とある。

(44) 一年七、八ヶ月の滞在で帰国(前掲資料「阿ゆみ」)、高等商業学部教授に転じる(前掲書『開校四十年記念 関西学院史』一七四頁)。

(45) 『関西学院大学陸上競技部七十年史』年表(一九八八、五一二―一三頁)に、「一九二二―二六年 部長 畑」とある。

(46) 学院史編纂室蔵の当該「文化大講演」プログラム(「大正十四年文化講演旅行」)に、山陽・四国での開催地の

記載がある。

(47) 前掲書『関西学院クリー・クラブ史』一五八頁

(48) 『関西学院時報』第一八号(関西学院学生会、一九二六年二月、四頁)。畑はユニット・システムの熱心な主唱者であった(『関西学院高等商業学部二十年史』(一九三二、九九―一〇〇頁)とあり、ユニットシステムについて、前掲書『関西学院百年史 通史編I』(三七六頁)に、一九二六年から実施、学院教育の個性尊重の精神がよく発揮される制度であった、とある。

(49) 吉岡美国名誉院長、畑教授を擁して、総勢十名が東都遠征した(前掲書『関西学院高等商業学部二十年史』一六一頁)。

(50) 前掲「履歴書」類に、「昭和四年十月 南米視察の為、関西学院教員一時退職」、「昭和四年四月ブラジル国産業視察の為渡航」、また前掲資料『阿ゆみ』(一九頁)に、「昭和四年になって関西学院を止め」とあるが、本略歴は、以下の資料に基づき退職年を一九二八年とした。前掲書『開校四十年記念 関西学院史』に、「昭和三年九月退職」(附録「旧教職員表」二四頁、一七四頁)、前掲書『関西学院事典』に、一九二八年九月退職とある。そして、一九二八年一〇月一五日附の畑の「教員解職ニ付開申」書(学院史編纂室蔵「専門部教員開申書綴」)があり、畑の「一九二八年分俸給賞与等資料」(学院史編

纂室蔵「稅務署願届書類等綴」)に、「昭和三年八月限辞職」と記載がある。

南米ブラジルは、畑にとつては宿望の地であつて、日伯親善の事業を推進していたが、ブラジル政府コーヒー局との販売・宣伝権譲渡の契約書を土産に帰国した(前掲資料「忘れ得ぬ恩師(三)」)。その後、畑は、高等商業学部第四回卒業(一九一九年)の星隆造が設立(一九二九年)したニッポン ブラジリアン トレイディング コンパニー(本社 大阪市北区)の顧問であつた記事がある(星隆造「一九三三年的情熱の相貌」『会報』第一三号、関西学院高等商業学部同窓会、一九三二)。また、星は「カフェブラジレイロ」を開いていた(和田博文編『コレクション・モダン都市文化』第二巻(ゆまに書房、二〇〇五、八五―九五頁))。

(51) 前掲資料『阿ゆみ』二二頁。なお、前掲「履歴書」は、一九二九年末帰国とある。

(52) 前掲「履歴書」に、「六月 関西学院専門部教員として文部大臣の認可を受く」とあり、畑の「一九三〇年分俸給賞与等資料」(前掲「稅務署願届書類等綴」)に、四月新任とある。また、「今春学院に復帰され講師として商科文科一二年に英文和(訳)を教授」(『関西学院新聞』第五二号、一九三〇年五月二〇日)の記事がある。

(53) 青木倫太郎「商經学部設立準備記録から」(前掲書『関

- 西学院七十年史』回想録、四八二頁)
- (54) 前掲「履歴書」
- (55) 『昭和九年度関西学院大学商経学部要覧』に、「講師 英語(七頁)とある。
- (56) 学生の自助会再建趣意書は、一月二七日附である(前掲書『関西学院百年史 通史編Ⅰ』五三四頁)。
- (57) 前掲書『関西学院グリークラブ史』三四九頁、前掲書『関西学院グリークラブ八十年史』三五四頁
- (58) 『饗宴』第二号(一九四〇年一〇月、関西学院文学部英文科)六九頁)。英文学鑑賞研究会(Sunday Evening Symposium)は文学部英文科に関係ある学生と畑を中心に設立された。
- (59) 畑道也(一九三九―二〇〇八年)は、関西学院大学文学部卒業、同大学院文学研究科修士課程修了、同研究科博士課程単位修了の後、一九七二年関西学院大学文学部助手となる。以降在職中は、学生部長、総合体育館長、文学部長、高中部長、そして院長(二〇〇四―〇七年)を歴任した。二〇〇八年三月死去。
- (60) 前掲書『関西学院グリークラブ史』三七四頁。七月一日に学院高商チャペルに於いて告別式が執行された。C. J. L. ベーツ院長等からの弔意を示す書簡および葬儀参列者の名刺が学院史編纂室に保存されている。くに江とは、一九三八年に結婚(本号の中條順子「伯母田中喜美代の『阪神大水害』被災記録」原稿より引用)。
- (61) 『関西学院五十年史』(一九四〇)奥付に、「編纂兼発行者 畑歛三」とあり、畑は編纂・発行に関する諸般の協議に参画。関西学院創立五〇周年当時、畑は商経学部講師・文学部講師・高等商業学部講師で、英語担当であった(同書「現任教職員一覧(昭和十四年十月)」三六〇・三七四・三七九頁)。
- (62) 前掲書『饗宴』第二号、五九―六七頁
- (63) 学院史編纂室蔵「昭和十八年度採用手続綴(関西学院本部)」書類に、「法文学部 講師 昭和十九年四月一日、英語(作文)」とある。
- (64) 田中喜美代については、本号の中條順子「伯母田中喜美代の『阪神大水害』被災記録」を参照のこと。結婚年については、同原稿より引用した。
- (65) 学院史編纂室蔵の沓澤吉太郎中学部長「退職願」の日付は三月七日。なお、畑を中学部長に任用する兵庫県知事宛願出の「学校長採用ノ儀認可申請書」(一九四五年三月二三日附、理事長神崎驥一)がある。
- (66) 前掲「履歴書」。教職適格審査の同日付の合格記録資料が、学院史編纂室蔵「適格審査に関する報告及び証明書綴(一九四七―一九四八年)」にある。
- (67) 『関西学院の歌―関西学院校歌・応援歌・学生歌資料』第一集(関西学院キリスト教主義教育研究室、一九八一

年、四八・七七頁）、『関西学院の歌―讚美歌・寮歌・部歌―』第二集（一九八七年、六頁）。なお、畑とH・F・ウツズウォース共訳の「関西学院校歌 空の翼」英語訳資料が学院史編纂室にある。

- (68) 『関西学院百年史 通史編Ⅱ』（一九九八）歴代役職者一覽に、六月二三日退任とあるが、学院史編纂室蔵の畑「辞職願」および「昭和二二年度退職手續綴（関西学院本部）」書類の退職日付は六月三〇日である。畑の辞任経緯は、『関西学院新聞』第二一七号（一九四七年八月三〇日）に、見出し記事「畑氏をめぐって」の記事がある。また、畑の中学部長辞任について、中村賢二郎「原田の森の人々」に、「終戦後中学部長として成績をあげていたが、学制改革の犠牲となって止めたのは惜しかった」と述べている（前掲書『関西学院六十年史』回想録、二一九頁）。

- (69) 『関西学院新聞』第二一六号（一九四七年七月一〇日）見出し記事「畑中学部長 突如学院を去る」に、「本年四月行われる学制改革を前に定年間近き理由により辞意を表明、幼な日の思い出の地、松山語学専門学校の一教師として赴任、（六月）一三三四四国に向け学院を去った」とある。また、「六月に松山語学専門学校に赴任。十ヶ月でやめられた」（前掲資料、平賀耕吉「畑歿三先生を悼む」）とある。

- (70) 前掲「履歴書」。なお、学院史編纂室蔵「昭和二四年度

採用手續書綴（庶務課）」に、「文学部 嘱託講師 採用二四年四月一日」とある。

- (71) 畑、神崎驥一ら十一人のOBが新月会員に囲まれて三曲を歌った（前掲書『関西学院グリークラブ八十年史』二五九頁）。なお、五〇周年記念合唱音楽会のプログラム（学院史編纂室蔵）に、畑の祝辞が掲載されている。また、同プログラム「古きグリークラブ卒業生」欄に、畑の名が記載されている。

- (72) 学院史編纂室蔵「昭和二五年度採用手續綴（本部庶務課）」の畑の欄に、「嘱託講師 経済学部 採用二五年四月一日」とある。なお、一九五〇年九月二〇日附で、商学部設置認可の上は、同学部英語担当の兼任の講師として就任するとの畑の「同意書」が学院史編纂室にある。

- (73) 今田恵院長就任にあたっての挨拶で述べられた事が実現することを願って、畑が今田院長にあてた書簡（一九五〇年五月頃）が、学院史編纂室所蔵資料にある。
- (74) 前掲書『関西学院グリークラブ八十年史』二九四・三五四頁。

- (75) 前掲資料「三日月の光」

- (76) 前掲書『関西学院グリークラブ八十年史』三〇九頁

- (77) 前掲資料「三日月の光」。なお、前掲資料、平賀耕吉「畑歿三先生を悼む」に、「海外書籍貿易、村田産業又は日本建設会社等の顧問に」とある。

- (78) 追悼式は学院商学部講堂で、河辺満穂元グリークラブ顧問(第二代)の司式で行われた(前掲書『関西学院グリークラブ八十年史』三五四頁)。
- (79) 前掲資料『阿ゆみ』一八一―一九頁
- (80) 前掲資料、平賀耕吉「畑歎三先生を悼む」
- (81) 前掲資料「三日月の光」
- (82) 前掲資料「吾等の大臣永井拓相を語る」
- (83) 前掲資料『阿ゆみ』

【追記】『聖和大学同窓会会員名簿』(一九九四年、竹中正夫『ゆくてはるかに』(教文館、二〇〇〇年)に再録)によれば、第四回一八九二年卒業生として「畑もと子」が挙げられている。また、'Kobe Woman's Evangelistic School,' (May 1922) の 'Graduates' 欄 (p.3) には 'Class of 1892, No.18, Hata Moto' と記されている。さらに同資料の 'Student List' の '1888-89 1st' (p.10) には 'Hata Moto' の名が、'1889-90 2nd' (p.10), '1890-91 2nd' (p.11) および '1891-92 3rd' (p.11) には 'Hata' の名が記されている。この情報については、聖和短期大学の原真和氏の提供を受けた。記して感謝の意を表します。

(比留井弘司、井上琢智)